

副島隆彦

アメリカよ、驕る無かれ！

テロ世界戦争と
日本の行方

I TOLD YOU

弓立社

I TOLD YOU

テロ世界戦争と日本の行方

アメリカよ、驕る無かれ！

副島隆彦

弓立社

副島隆彦 そえじま たかひこ

1953年、福岡生まれ
早稲田大学法学部卒業
現在、常葉学園大学助教授

政治に関する主著
「属国・日本論」(五月書房)
「日本の秘密」(弓立社)

テロ世界戦争と日本の行方 アメリカよ、騙る無かれ!

2001年11月15日 第1刷

2001年12月10日 第2刷

著者 副島隆彦
装訂 宮下亮(TATU design)
組版 ワニブラン
印刷・製本 中央精版印刷株式会社
カバー印刷 長苗印刷株式会社
用紙 富士川用紙店

出版者 宮下和夫
出版 弓立社 ゆだちしゃ
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-17
TEL 03-3294-3200 FAX 03-3294-3209
E-mail info@yudachi.net
URL <http://www.yudachi.net>
振替 00160-3-177229

ISBN4-89667-107-4
不良品はお買上げの書店でお取り替えします。
または小社へお送り下されば、送料小社負担でお取り替えします。

© SOEJIMA TAKAHIKO
I TOLD YOU
2001-11 Yudachi-sha., Ltd

この本「テロ世界戦争と日本の行方」は、9月11日に起きた米中枢同時テロ事件についての私の考えを緊急に書いたものを冒頭に2本載せている。

米テロ事件とそれにつづくアメリカのアフガニスタン報復爆撃までは視野に入れている。

世界は全く新しい状況に突入したのではないか。もしこれを名づけて呼ぶとすれば、the New Cold War Era (ザ・ニュー・コールド・ウォー・エラ)「新しい冷戦時代」の幕明けと呼ぶことになると思う。あるいは、やはり、フランシス・フクヤマが、事件直後に使った「アメリカ例外主義のおわり」the end of America's exceptionalism (ジ・エンド・オブ・アメリカズ・エクセプシヨナリズム)という考え方が今のところ一番大きいように思われる。驕り高ぶったアメリカも又、人類の歴史の例外の地ではなくて、戦乱の地と化するのである。

1991年12月にソビエトを打ち倒して、「唯一の超大国」となったアメリカが世界を一極的に支配する世界体制が完成して10年、世界はこのまま続いていく……と思ったとたんに、人類(人間)の21世紀は、新しい戦争の世紀になってしまった。

今や、ロシアも中国も従順になってアメリカが一極支配する世界の一地域(リージョン)でしかなくなったかのようにさえ見える。しかし欧州(EU)、ヨーロッパ連合)はちがう。中東イスラ

ム世界もちがう。

では、私たちの日本国を含む東アジア（極東、ファー・イースト）はどうなのか。

アメリカ合衆国は、「唯一の超大国」なのではなくて、実は、世界覇権国（the hegemonic state）ヘジモニック・ステイト。ドイツ語式ならヘゲモニック・シュタート）なのであり、日本はその属国群のひとつに過ぎない。日本の運命は、これからも「世界覇権国（＝世界帝国）アメリカ対 属国日本」という基本構図で決まってゆく。この理論を、この10年、私は独力で築きあげて提唱してきた。何冊も本にしてきた。さあ、この理論の欠点や、破綻点があるならば、どこからでも、どなたからでも私に打ちかかって来てもらおうではありませんか。

この本の主要部分は、アメリカからの強圧と指導の下ではんろう翻弄される日本の政治指導者たちの姿を写真したものである。現在に至るこの15年間の、日本の実力者政治家たちの動きを分析的にとらえた。この本で私ははじめて、自分独自の竹下登論、中曾根康弘論、野中広務論、小泉・眞紀子論等を世に問う。私の「戦後宰相論」の骨格が出来たのである。

そえじまたかひこ
副島隆彦

目次

まえがき

I 米テロ事件を読み解く

アメリカよ、驕る無かれ！

米中枢同時テロ事件に大陰謀の背景はあるか

29 10

II ドキュメント・日本政界 その激しく生々しい動き

小泉改革の失敗と来年春の衆院解散・総選挙へ向かって

小泉・眞紀子の戦いの進展の現状

小泉・眞紀子の戦いを応援する

野中広務ドラキュラ論

および私がテレビで橋龍に叱られた件

100 82 67 56

3

田原総一郎氏を批判する

現下の政治情勢は物凄い

米原潜と漁業実習船の衝突と森首相

米中衝突の可能性と日本の国内問題

自民党「加藤叛乱」とその後の政局

194 183 171 164 151

Ⅲ 日本王朝交代劇」竹下登論・中曾根康弘論・小泉・真紀子論

自分の走り書き力作

日本の政治のこの15年」竹下登論の始まり

『田中角栄の真実』を読んだ

『渡邊恒雄 メディアと権力』を読んだ

小沢一郎革命の終わりについて

257 230 219 206

Ⅳ 世界視点から見た日本経済

日本経済、どこまで墮ちるのか」日・米の政治・経済早わかり

270

V 日本、自立への道

安全保障を自前（自分の力）で考える

「ドイツに学ぶ、日本の安全保障の自立への道

あとがき

I

米テロ事件を読み解く

アメリカよ、 驕る無かれ！

(2001・9・13)

URL <http://soejima.to/>

副島隆彦です。今日は2001年9月13日です。

昨夜、私は、10時半ごろから、燃え盛る2棟のWTC（世界貿易センター）ビルのテレビ映像を見ていた。この「アメリカ攻撃」事件のテレビ中継を午前1時ごろまで見て、それで寝てしまった。朝5時に起きたら、まだ巨大ビル火災の映像をやっている。2つの超高層ビルが、次々に倒壊してゆく映像までは昨夜見ていた。その前に、ワシントンDCのマクアネにある米国防総省（ペンタゴン）にも飛行機が突っ込んだ映像が入っていた。連邦議事堂（キャピトル・ヒル）の前でも自動車が爆破したようだ。

私の考えは、やはり、これは「ブローバック（アメリカ帝国への報復）」（日本研究者の最高峰チヤルマーズ・ジョンソン博士の本の名前）である、というものになる。世界覇権国になったアメリカが傲慢になって、あまりに世界の各地域（リージョン）を、傍若無人に（ぼうじやくふじん）いじめて回ったので、それに対する逆襲が起きたのだ、と判断した。この私の見方（観点）は、私自身には、実にしっくり行

くものだ。私がこれまでずっと書いてきたものと一切、全く齟齬（食い違い）が無い。

私の観点と敵対する人びとの考えは、「残酷な世界同時テロルだ。イスラム原理主義者たちの非人道的な無差別攻撃を許すな」という考えになるだろう。しかし、どうせそんな皮相な考えでは済まない。アメリカのグローバリストたちは、深刻に反省した方がいいのだ。それと、日本を含めた各属国内で、あまりに、アメリカの手先になって、同族の民衆の生活がこんなに追い詰められているのに、それを、「アメリカのせいなのだ」と、一言も言わないで、ずーつとやってきた人たちは、全員反省するがよい。

私が、今、ネットを開いて見た記事の中では、次の一行が納得がいった。

「米国民にとっては、米国内地が攻撃された初めての「戦争」ではないか。奇襲されたという意識が強いと思う」と話した。
(毎日新聞「9月12日6時11分更新」)

つまり、アメリカ国民の感覚からすれば、これは、パール・ハーバー・スニーク・アタック（真珠湾奇襲）と同じものらしい。きつとそうだろう。それも「米本土（メインランド）」が攻撃された初めての「戦争」だ、と感じられているのかもしれない。確かにこれは、戦争だ。戦争と言えば戦争だ。同時多発テロと言えばテロだが。

政治家たちを含めてアメリカ人たちの表情や言葉に、あまりそれほど正義の怒りが感じられない。どうも、彼ら自体が、「どうしようもないな。こんな事をされたら」という感じで、諦めの表情の

ようなものを浮かべている。

まず、記録として残すために、以下に、ネットで拾った新聞記事を貼り付けておく。

海外ニュース 9月12日(水) 6時11分

〔対米大規模テロ〕貿易ビル倒壊 同時多発で死傷者は数千人か

【北米総局】ニューヨーク、ワシントンなど米国東部の中枢都市とその近郊で11日朝(日本時間同日夜)、巨大な高層ビルや国防総省、国務省など政府関係機関を対象にした同時多発テロが発生した。数千人規模の死傷者が出た。複数の民間航空機をハイジャックし、次々に建物が激突させるという前代未聞、史上最悪の事件は、米国と世界を震撼させ、日本を含む各国が警戒態勢に入った。

米CNNテレビによると11日午前9時(日本時間11日午後10時)ごろ、米ニューヨーク市中心部にある世界貿易センタービル(110階建て)2棟に航空機2機が相次いで突っ込んだ。ビルは炎上、高層ビルの上階部分(80階から85階)が大破し、巨大な火の玉と黒煙を上げながら爆発を繰り返した。約1時間後、世界貿易センタービルの南タワーに再び爆発が起き、このビルは倒壊し、その後、別棟のビルも倒壊した。少なくとも6人が死亡、1000人のけが人が確認された。死傷者は数千人に上るとみられる。

AP通信などによると、さらに同日午前9時38分、ワシントン近郊の国防総省(ペンタゴン)に飛行機が突っ込み、爆発が起き、同ビルの一部が損壊した。また国務省の前で車が爆発した。

ワシントンの地元ラジオ局によると、ブッシュ米大統領は遊説先のフロリダ州から戻ることになったが、ホワイトハウスが危険とみて、大統領専用機から指示を出している。またワシントンの連邦政府ビルすべてに退避命令が出された。

さらに同日午前、米ペンシルベニア州ピッツバーグの南約130キロでシカゴ発ニューヨーク行きのボーイング747が墜落した。CNNテレビによると、同日ユナイテッド航空2機が墜落したとの情報がある。米アメリカン航空は同社の2機が不明になり、両機に計156人が乗っていたことを明らかにした。

米連邦航空局などによると、11日午前、全米で少なくとも計4機の民間航空機がハイジャックされ、3機の墜落が確認された。CNNテレビは、米空軍は同日午前、ハイジャックされた飛行機に対するワシントン防衛のため戦闘機を緊急発進させた、と伝えた。

ニューヨーク、ワシントンなどを主舞台にした一連の出来事は、反米過激組織による同時多発テロと米政府当局はみている。米国で国内の行政、経済関連施設がこれほど大規模に同日に攻撃されたのは歴史上、戦時も含め初めて。事件の背後には、単なる組織レベルを超える動員力を持つ勢力があるとみられる。今後、内政だけでなく国家レベルでの外交・軍事面で米国に大きな転機をもたらさそうだ。

世界貿易センタービルの飛行機衝突事件について、発生直後にパレスチナ解放民主戦線（DFLP）が犯行声明を出したとアブダビテレビが伝えたが、DFLPはこの報道を否定した。しかし、かなり組織性のある計画的テロであるため、パレスチナなどのイスラム過激派の関与

を指摘する声が上がっている。

A P通信によると、米航空当局は米国内の飛行機の離陸をすべて禁止した。

(毎日新聞)

副島隆彦です。私は、今度の攻撃実行部隊は、上記の記事の中にあるパレスチナ解放民主戦線(DFLP)ではないと思う。パレスチナ・ゲリラにはここまでやれる力はない。彼らはパレスチナの居住区で生き延びるので精一杯だ。やっぱり、オサマ・ビン・ラディーン(サウジアラビアの富豪の出で、イスラム原理主義者の指導者で、アフガニスタン戦争の英雄)の系統やイスラム聖戦機構の人々だろう。

オサマ・ビン・ラディーンは、アメリカが育てた人物だ。1979年からのアフガニスタン内戦でのソビエト軍との戦いに、イスラム義勇軍として現地に入った人々だ。彼らを、背後から支援したのは、アメリカである。アメリカの特殊部隊(軍事顧問団)の指導を受けた、ムジャヒディーン(イスラム原理主義ゲリラ)たちは、ソビエト軍の最新鋭の戦車部隊や、戦闘ヘリコプターの前に苦戦した。それで、アメリカ軍が、ステインガー・ミサイル(肩にかけて持ち運べるロケット砲)を2万丁も援助したという。このときラディーンらが技術指導を受けて、育てられている。資金のほとんどは、サウジアラビア政府から出ている。石油をアメリカ政府に売ったその代金である。だから、彼らムジャヒディーンは、アメリカの軍事技術に精通している。

パナマの英雄だったノリエガ将軍も、アメリカが育てた人だ。こういう風に、世界帝国は、周辺

属国の民族指導者たちを、手なずけるか、始めから自分たちの操り人形として育てる。ところが、その属国指導者（ナシヨナリスト）たちが、帝国に対して叛乱を起こして、民族自立の闘いを始めたりする。

だから、一国の指導者になる者たちは、国内と、外国の大国（旧宗主国）の両方に裏でつながっている人でなければならない。そして、どんな時も、その国で一番大きな軍事力と資金力を持つ者を、その国の最高権力者（真の国王）という。

私は、今度の「同時多発テロ」は、これで、一段落だと思う。アメリカ政府は、国家として臨戦態勢（国家緊急事態体制）に入っただろうから、これで、ゲリラの攻撃はひとまず終わりである。

次は、アメリカ政府が、ラディーンらに報復攻撃をかける番だが、ジェット機による誘導ミサイルや艦船からの巡航ミサイル攻撃では、アメリカ国民が納得しない。「犯人たちの指導者を生きたまま逮捕して裁判にかけよ」という感じになるだろう。しかし、この犯人搜索はうまく行かない。ゲリラ戦を仕掛けられたら、正規軍というのは案外弱いものだ。防戦一方で、図体の大きい自身を守るので精一杯になるからだ。

中東・アラブ世界で、新たに米軍が軍事展開するほどの力はない。なぜなら、今度の「戦場」は、アメリカの国内だからだ。だからあくまで、このあとは「犯罪捜査」となるから、中東各国の国家主権（ソブランティ）の捜査権と裁判権の壁に阻まれて、うまく行かない。ラディーンらを、報復ミサイル攻撃で暗殺するくらいでお仕舞いにするしかないだろう。それでも、アラブ・ゲリラたちによる反米実力闘争は止まない。こうやって世界政治は、これからも続いて行く。事件も死傷者の

数も次々に新記録をうち立てながら。

そもそも、アメリカ合衆国自体が、私がこれまで書いてきたとおり、²³⁰年前に、イギリス国王のロイヤル・アーミー（植民地派遣の正規軍）に対して、貧しい開拓農民（屯田兵）たちが「土民の叛乱」を起こして、戦い続けて、消耗戦のはてに、独立を勝ち取った国だ。

だから、独立戦争のゲリラ戦というものの残虐さを今でも国民的に記憶に残している。ジョージ・ワシントンが率いた正式の独立軍なんか、装備も整わない弱兵部隊だったから逃げ回っていた。あくまで、各地の開拓農民たちの自発的な蜂起による反英ゲリラ活動が、中心である。ゲリラの待ち伏せ攻撃（アンブッシュ）に怒ったロイヤル・アーミーが、開拓村に入つて、報復のみせしめに村人処刑をやり、村を焼き払う。これの繰り返しだ。ゲリラ戦は、一般民衆までも巻き込んだの殺し合いとなるから、惨忍さを極めるのだ。やがてイギリス国王や派遣軍司令官たちが激しい厭戦気分には捕らわれて、それで、軍事撤退してアメリカは独立を勝ち取ったのだ。

日本は、1937年7月の日華事変（シナ事変、盧溝橋事件）以降、中支と北支で、8年間の消耗戦をやつて150万人の兵隊を釘付けにされた。中国軍（蒋介石が率いた国民党軍）との「アジア人同士」戦いでは負けなかった。しかし毛沢東のゲリラ部隊（共産赤匪）に苦しめられた。それで同じように戦略村を焼き払って報復している。重慶から武漢にまで撤退した国民党政府との膠着戦（泥沼状態）が、日本の真の敗因だ。日本陸軍は「打通作戦」という中国の都市から都市へひたすら行軍するだけだった。

それでルーズベルトとチャーチルの挑発に乗せられて、日本の海軍が、真珠湾奇襲を仕掛けた。